

## 平成30年度 全国学力・学習状況調査 根戸小学校の結果

### <教科に関する調査結果より>

総合的にみて、本校の結果は「知識」・「活用」どの観点も全国平均を大きく上回っている。

問題A：主に「知識」に関する問題 問題B：主に「活用」に関する問題

#### 【国語】

問題A：「知識」について

- ・全ての項目で全国・県平均を上回っている。特に、「言語」の項目は大きく上回っており、主語・述語の関係に注意して正しく文を書いたり、相手や場面に応じて敬語を使ったりすることができている。また、漢字を文の中で正しく使うこともできている。「話す・聞く」の項目においては、相手や目的に応じて伝えたいことを筋道立てて話す力はやや弱いと言える。

問題B：「活用」について

- ・全ての項目で全国・県平均を上回っている。特に、「話すこと・聞くこと」の項目は大きく上回っており、話し合いの中での質問の意図を捉えたり、話し手と自分の意見を比べて考えをまとめたりすることができている。「書く」、「読む」の項目においては、目的や意図に応じて書いたり、読んだりする力については、まだ伸び幅があると言える。

#### 【算数】

問題A：「知識」について

- ・全ての項目で全国・県平均を大きく上回っている。特に、「数と計算」の項目は大きく上回っており、問題場面における数量関係を数直線上に表したり、小数の除法の意味について理解したりすることができている。「量と測定」の項目においては、混み具合の比べ方や角の大きさについての理解がやや不十分であると言える。

問題B：「活用」について

- ・全ての項目で全国・県平均を大きく上回っている。特に、「数量関係」の項目は大きく上回っており、数量の関係を考察し、分配法則の式に表現することができている。

### <児童に対する質問紙調査結果より>

本校では、体育科の研究やNAP活動等を通して児童の「人間関係」を構築することや「自己有用感・自己有能感」を高めることを目指している。また、今年度の経営方針においては「自律」をテーマとし、日々の指導にあたっている。これらに当てはまる主な項目についての本校の状況は、以下のとおりである。

#### 「当てはまる」・「どちらかといえば当てはまる」と答えた割合

- (1) 自分にはよいところがあると思いますか。(自己有用感・自己有能感)  
【昨年度】80.2%→【今年度】89.8%
- (2) 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。(自己有用感・自己有能感)  
【昨年度】91.4%→【今年度】88.8%
- (3) 将来の夢や、目標を持っていますか。(自律)  
【昨年度】78.8%→【今年度】90.9%
- (4) 学校のきまりを守っていますか。(自律)  
【昨年度】96.9%→【今年度】98.0%
- (10) 家で、計画を立てて勉強をしていますか。(自律)  
【昨年度】69.4%→【今年度】79.6%
- (57) 学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。(人間関係)  
【昨年度】DATAなし→【今年度】85.7%

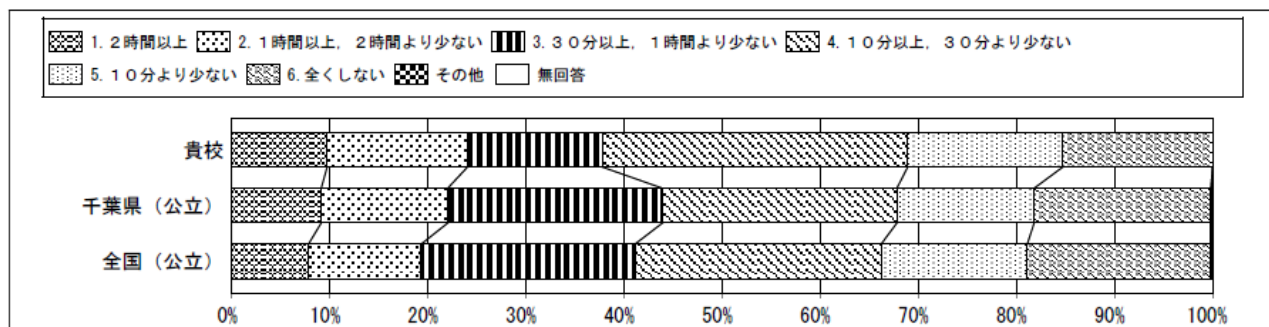
数値からも、全体的に描いている児童像に近い姿になっているようだ。よい人間関係の中で、協力して学習に取り組んだり、日々の生活を過ごしたりしていることがわかる。これまでの体育や算数を中心に学び合う活動（アクティブラーニング）や、毎年度の学級編成、高学年における少人数指導などの取り組み等の成果が発揮されているのであろう。

これは6年生のみを対象に行った調査の結果と昨年度の6年生の結果を比較したものであり、対象も

異なるため一概には言えないが、昨年度より取り入れた、NAP (Nedo Adventure Program) や「自律」という合言葉を用いた声かけなどにより、自分を大切に思ったり、自分を認めたりする児童が多いことが分かる。

また、今年度の経営方針において「読書活動の充実」を目指しており、それに関する質問項目の結果は下記のとおりである。

質問番号	質問事項										
(15)	学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
貴校	9.7	14.3	13.8	31.1	15.8	15.3				0.0	0.0
千葉県（公立）	9.1	12.9	21.9	23.9	14.0	18.0				0.1	0.1
全国（公立）	7.8	11.5	21.8	25.1	14.9	18.7				0.1	0.1



1日1時間以上読書をする児童の割合は24.0%で、全国・県平均を上回っているが、30分～1時間行っている児童が全国・県の平均より極端に少なく、10分～30分の児童も非常に多い。つまり、読書をする児童は長時間行すが、しない児童はほとんどしないという、両極端な状況である。読書に親しみのない児童が読書の面白さを感じられるよう、どうアプローチしていくかが今後の課題である。

ただ、昨年度は1～4の選択肢に該当する児童は全国・県平均を全て下回っていたため、確実に読書に対する意識は向上しているとも言える。これだけでは、現在の6年生のみを対象に4月に調査したものであり、今度から始めた取り組みの成果を図ることは難しいが、校長おすすめの本を紹介する「校長のひとりブックトーク」、校長が毎月1冊図書室に寄贈する「ノグチゲラ文庫」などの取り組みは、確実に児童を読書の世界に引き込んでおり、十分に手応えを感じている。更に、教科指導の中で図書をどう活用するか検討していく必要がある。また、図書委員会の活動などにおいても、児童の主体的な取り組みを入れながら、継続して推進していきたい。